

出羽三山の文芸

優れた俳人である松尾芭蕉（1644～1694 年）は、日本で最も著名な文学者であり、出羽三山から着想を得ています。『おくのほそ道』は、詩的な旅の記録です。この本で、芭蕉は、東北地方を巡った自身の旅について記しています。『おくのほそ道』は、日本文学の最良の例の 1 つだと広く考えられており、複数の言語に翻訳されてきました。

160 日間の芭蕉の旅は、彼が江戸（現在の東京）の自宅を出発した 1689 年の春に始まりました。彼の旅はほとんどが徒歩で、時に危険なものでした。道は限られており、道中の宿は質素なものでした。芭蕉は出羽三山地域に到着して 8 日間滞在し、羽黒山（414 m）、月山（1,984 m）、湯殿山（1,500 m）に登りました。

芭蕉が羽黒山にいた時に詠んだ俳句は、俳句自体を定義し直すものでした。彼は、「不易流行」という独自の様式を創り出したのです。これは、四季を通して変化し続ける自然を俳句によって伝える際の考え方です。現在、この技法は芸術の中心となっています。

有難や
雪をかほらす
風の音

Oh how wonderful
The snow encapsulated
Echo of the wind

出羽三山地域での芭蕉は、南谷の寺院に滞在しました。南谷とは、羽黒山の西側斜面にある「三の坂」のふもと近くの谷です。この寺院の建物はもうありませんが、その跡は今も残っています。羽黒山では、芭蕉は他に精進料理を食べ、この地について俳句を詠んだことが知られています。精進料理とは、仏教の僧が食べる菜食料理のことです。山腹には芭蕉の記念碑があり、山頂には芭蕉の像があります。